

# 松本の旧開智学校 設計に尽力

## 立石清重の功績知って



資料を手に、立石の功績や旧開智学校の意匠などを説明する梅干野さん（中央）

### 信大准教授がガイド 擬洋風建築巡る

松本市内の会社社長やNPO法人理事らが運営する観光ガイド事業「ココブラ」は23日、旧開智学校校舎を設計した地元の大工・立石清重（1829～94年）の建築をたどるツアーを、同市開智2にある同校舎などで実施した。信州大学術研究院工学系准教授の梅干野成央さん（39）＝日本建築史Ⅱが、松本地域の建築文化に継承された立石の功績を紹介した。

重要文化財で国宝指定が答申された校舎は、西洋の意匠を伝統技術で再現する「擬洋風」の建築。市教委による2016～17年の調査研究に参加した梅干野さんは「擬洋風は見よう見まねの技術とも言

われるが、洋風の建築を日本の大工が解釈し、和風のデザインを組み合わせて生み出した」と紹介。唐破風や瓦屋根の伝統技術に竜、雲、天使など和洋が混然となった彫刻を配置した校舎正面を「立石の創造性があふれている」と評価した。

この日は、立石が最晩年に造った擬洋風の旧三松屋蔵座敷（松本市中央3）も見学。梅干野さんは「少なくとも大正時代までは立石が持ち込んだ洋風の文化が受け継がれている」と説明した。市内外の15人が参加。今春事業を始めたココブラは、案内人の個性や専門性を売りにしたツアーを開いている。